

未知の世界への挑戦に誘われ



「もてないのは顔がむくんでいるからだ」と真剣に考え、大学時代に自分用のサウナを買いました」と笑う水野敬也さん

ベストセラーになり、ドラマ化もされた小説『夢をかなえるゾウ』を執筆した作家の水野敬也さん(40、1995年卒)は高校時代、いつもコンプレックスを抱えていた。小学生の時、勉強も運動もでき、完璧だったヒーローが、東海では「ただの人」になってしまったからだ。

勉強でも運動でも勝てないなら、何で勝負するか。面白さ、おしゃれさ、顔……。自分がどの位置に立っているのかということばかりが気になるものの、逆転の糸口は見えなかった。「挫折の日々だった」という。「大学では絶対に何かでトップの位置を占める」。固く心に決め、慶応大学経済学部へ入学。金

髪で通い、「イケてる」先輩たちに片っ端から声をかけた。周りの人たちにかわいがられるために気を遣い、家に帰るとぐったりする毎日だった。疲れていても、毎日やると決めて書くことがあった。反省日記を書くことだ。「今日一日、どこがイケてなかったか」を考え、翌日の行動に生かす。心理や脳科学の本も大量に読み、参考にした。学校での自分の価値や立ち位置を考え続けたことで、自分なりの答えが少しずつ見えてきた。自分なりにはあるもの、みんなに伝えられることがあるのでは。25歳で執筆活動が始まった。

「中高生時代の挫折が、執筆のエネルギ―です」出版社の文響社(東京都港区)で社長を務める山本周嗣さん(40、95年卒)は、小さいころから

勉強が大嫌いだった。「勉強を娯楽にできれば、もっと楽しく勉強してくれる子どもが増えるはず」。そんな思いで作った小学生向けの「うんこ漢字ドリル」の売れ行きは好調だ。

中学生までは成績はトップクラスだった。ただ、いつも「やらされている」と感じていた。「ここから飛び出した」。自由な雰囲気にあてがれ、高校1年生でアメリカンフットボール部に所属。「やらされている」から「自分で選ぶ」へ「初めての脱皮のようなものだった」と振り返る。

成績はみるみる落ちていったが、世界は広がった。かけがえのない友人もでき、友人を通じて、自分が目指す道を意識し始めた。

学習院大学法学部を卒業後、外資系の証券会社に就職。ほかの会社からスカウトを受けるほど優秀な成績を収め、仕事も楽しかった。だが、「先が見えないところに行きたい」と退職した。

「東海の友人には、自宅の庭にテニスコートがあるような人もいました」と話す山本周嗣さん



いつか一緒に仕事をしたいと考えていた前述の水野さんと本を執筆し、文響社を設立。地道に書店を回ることから始め、ベストセラーを生み出している。「未知の世界に挑戦する楽しさを教えてくれたのは、高校だった」